

## 日本演劇の近代化における異文化受容

神山 彰

Intercultural encounter in modernization of Japanese theatre

Akira KAMIYAMA

## 1 はじめに

幕末・明治期の異文化受容については、既に各分野で従来の成果を踏まえた上で、近年では視点を変えた多面的な研究がなされている。しかし、日本演劇に関しては、近代化の問題は多分に公式見解的な批判が、依然として一般的である。また、外国演劇の受容の研究が、劇作家や戯曲の移入や紹介に力点が置かれていたため、実際の芝居（劇場）で見物（観客）が受けとめた「開化」の演劇の実感との距離があった。当時の目に一丁字ない見物層にまで、演劇も「文明」の余沢を蒙って変質していくことを実感させたのは、建築物としての劇場の変容であり、その外部を装飾し、やがて客席から舞台にまで侵入して、結果として劇場の性質を決定的に変えてしまった瓦斯や電気の照明であり、それと関連して見物の視覚や写実感を無意識の内に変換していった油彩や洋画による舞台装置だった。

庶民が「文明開化」を観念や概念でなく、政府が呈示する具体的な「もの」として理解したのは、他の分野と共通している。「科学的知識」の啓蒙を目的で行われた「博覧会」も、江戸以来の「見世物」の感覚で接したからこそ、驚く程多くの人々が訪れたのだ。演劇も事情は同じであり、開化の見物が瞠目した具体的な「もの」である、劇場や装置や照明等々の西洋の劇場技術の受容を可能な範囲で調べ、「近代化」と併行して生じた「演劇」という概念の成立の一端にまで及ぼしたいというのが本研究の目的である。

初年度は、主として、以下の点について、劇場の役割な機能について考察を試み、それが新たなイメージとしての「演劇」に如何に収束していくかという問題に繋がった。

## 2 明治前期の欧米の劇場のイメージ

明治初期の文明開化の時代に紹介された夥しい海外情報のなかでは、隣接する芸術関連分野に比べれば、演劇関連のものは多くはないとはいえ、それでも現段階では網羅する事はできていない。そのなかから、海外の劇場を実見した記事、資料を選択し、劇場のイメージが形成

されていく過程を考えた。

周知の通り、幕末・明治初期の「欧米派遣使節団」一行は、多忙極まりない日程の合間に、幾度かは当地の劇場に足を運んでいる。但し、著名な『米欧回覧実記』においても、あくまでも衣食住の生活に直接関連する実業や産業、教育、自然科学、医学等々への旺盛、果敢な好奇心や知識欲、使命感に比べると、たまさかに見出すことの出来る「劇部」（劇場）の記載は、極めて乏しい。

幕末の記録では、市川 渡『尾鰻欧行漫録』にある、文久2年（1862）3月17日のバリ・オペラ座のものが古く、また、慶応4年（1868）5月発行の『此花新書』第2号、フィラデルフィアの劇場について、舞台の挿絵入りのある程度長い内部の記載があるのが、初期の紹介に属する。

明治初期になると泰西の小説、戯曲は多くが「翻案」の形で紹介され始める。戯曲の翻案でも、同時期の作品が意外なほど早く紹介されているのに驚かされるが、本研究で興味深いのは、それらの多くは冒頭に必ずと言っていいほど挿入されている、彼の地の劇場の挿絵であった。従来、翻案戯曲の紹介はあるが、この外国劇場の挿絵の意味については、等閑にふされていたと思えるが、近年の文学・美術等の隣接領域の研究を視野にいれると、この種の挿絵が読者に本文以上に喚起したイメージの大きさは看過しえないと思える。

明治10年代には、早くも単行書として海外の「演劇史」や案内書が出版され始めるが、そこでも冒頭の口絵や文中の挿絵は一種の売り場である。

『世界旅行・万国名所図絵』（明治17年・1884）は早い時期の海外旅行ガイド・ブックだが、そこには、バリの劇場の芝居のあらすじや演出だけでなく舞台裏の仕掛けまでもが図入りで紹介されているのが珍しい。同年には、永井 徹『各国演劇史』と題する本が出版されているが、これは各国の劇場についての細かい記述が見られ、「演劇史」というより「劇場史」という方が正確であるような書物である。

文学通り『演劇史』と題され、内容的にも「日本演劇史」と「西洋演劇史」とからなる流鶯散史（谷口政徳）編述による著書は、明治20年（1887）に出版されるが、ここでも劇場内部の口絵、俳優の挿絵等が掲載されている。

この二冊の書は、従来殆ど関心を持たれず、論及されてもいないが、近年問題となっている隣接分野の「文学史」「美術史」等の概念の成立過程を、演劇の側面から考える上でも興味深い。つまり、「演劇史」は、西洋の文脈を前提として、それに日本を当てはめていく過程で成立しているからである。

### 3 外国人演劇とコンドルの劇場

明治期には、国内の外国人居留地に劇場が設置され、外国人による演劇が上演されており、九世市川団十郎、五世尾上菊五郎、河竹黙阿弥らの世代から、新世代の小山内薫の世代に至るまで足を運んでいる。後に「自由劇場」を起した当時の小山内は、実際の「女優」はこの居留地劇場でしか見たことがなかったのである。

もっとも、江戸時代にも、文政3年(1820)には、長崎・出島でオランダ人による芝居が上演されており、邦訳までされ、その評価は伝聞も含めて、大田南畝(蜀山人)、宇田川裕庵ら著名な人により紹介され、川原慶賀が描いたという。

ここで演じられた以外には、明治期には外国人による演劇を上演する団体があった。それがお雇い外国人教師の英国人建築家ジョサイア・コンドルも所属していた「東京演劇音楽協会」である。そこで、コンドルは自ら舞台に立つほか、本業の建築に近い舞台装置も担当している。明治政府が劇場計画を、ジョサイア・コンドルに依頼したとされる時期は、正確には不明である。日本の劇場について論文も書いていた彼の劇場計画が「和風」であったために却下されたというのは、日本と欧米に代表される「近代」とが相互に求める価値の差異を象徴している。

### 4 都市計画と劇場

明治初期の東京の都市計画での劇場の位置については、明治18(1885)年の山崎直胤案が知られている。その翌年のウィルヘルム・ベックマンによる計画では、東京駅(当時はなし)から宮城に向う「ミカド通り」に、劇場が設置される案である。これは、現在の文脈からは見過ごされがちな事であり、また当時にしても、宮廷劇場の制度を持った欧州の都市計画の専門家にすれば、自明の発想だったかもしれないが、江戸幕府の19世紀の都市計画からすれば、転倒したものだった。

天保13年(1842)、幕府は江戸三座に浅草猿若町への移転を命じたが、当時の地図を見ると実感されるように、そこは田圃に囲まれ、当時の水路や駕籠での往来からしても、交通不便な地域である。つまり「芝居」(江戸では、演劇も劇場も多くの欧米語同様、同一の単語が一般的で、今日多用される「芝居小屋」という語は少なくとも江戸三座の格や規模では用いない)は、少なくとも幕末の江戸では、政治の中心より遠く、しかも鬼門に当る田地に位置させることにより、庶民に、言葉によらずとも、視覚的に、或いは生活実感として、「悪所場」として認知させる効果を、幕府の都市計画は持っていた。勿論、当地は、「悪所場」であることにより、結果としては繁栄することになった。

それが、明治の都市計画では、逆に、宮城の近くに位置させることにより、視覚的に庶民に、「芝居」の属する文脈の変質を感じせしめる効果が考えられていただろう。

### 5 次年度の計画

次年度は更に具体的な受容段階としての、舞台装置(背景)や照明の問題の調査に進めたい。松居松葉、山本芳翠等、演劇の視覚的受容の側面で重要と思えるが、従来その文脈では触れられる事少ない人物の足跡を辿り、彼等の果した役割を通して、「演劇」概念の形成過程を再考する一助としたい。